

会派視察研修計画書

平成29年9月12日

碧南市議会議長 様

会派名 公明党

代表者名 加藤 厚雄

下記のとおり、視察（研修）を計画したので届け出ます。

参加議員	大竹 敦子	
日時	平成29年10月5日（木）～平成29年10月6日（金）	
視察先	宮城県岩沼市	
研修内容	第18回介護保険推進全国サミットinいわぬま	
日程	10/5 介護保険推進全国サミット 13:30～17:40 10/6 介護保険推進全国サミット 10:00～15:00	
交通手段	公共交通機関利用 乗降車駅名（ 碧南中央駅 ）	自家用車利用 _____ 台 所有者名（ _____ ）

様式14

会派視察研修報告書

平成30年2月19日

碧南市議会議長 様

会派名 公明党

代表者名 加藤 厚雄 印

下記のとおり、視察（研修）を実施したので報告します。

なお、参加者議員 1 人分の視察研修成果報告書を添付いたします。

参加議員	大竹敦子
日時	平成29年10月5日（木）～平成29年10月6日（金）
視察先	宮城県岩沼市
研修内容	第18回介護保険推進全国サミットinいわぬま
日程	10/5 介護保険推進全国サミット 13:30～17:40 10/6 介護保険推進全国サミット 10:00～15:00
備考	

※ 相手方から收受した資料の写しを添付してください。

会派視察研修成果報告書

平成30年 2月19日

議員氏名 大竹敦子

視察（研修）に参加したので、下記のとおり成果を報告します。

記

- 1 期間 平成29年10月 5日（木）～平成29年10月 6日（金）
- 2 視察先 宮城県岩沼市
- 3 視察の種類 研修
- 4 視察の成果等

第18回 介護保険推進全国サミット in いわぬま

地域共生社会へ向けて

—環境や人づくりによる「地域包括ケアシステム」の推進—

基調講演 慶応義塾大学 名誉教授 田中 滋氏

19世紀末から、公衆衛生の発達、近代医学の発達、それを支える社会保障制度の普及により、長寿者が増加した。高齢者の死亡率が減ることにより、100歳を超える高齢者も増え、介護者の発生率も増えてくるのは必然である。

しかし、今の団塊の世代は、将来、要介護になる可能性があることが予測できることから、まずは、団塊世代本人の責任で介護を受けないように予防をすることに重点を置いているとの話をされた。高齢化社会を迎える世代にとってとても重要な観点であると感じた。

また、高齢者の問題として看過できないことに、医療でも介護でもない、貧困、虐待、孤立といった福祉的課題が起きていることが分かってきている。医師や看護師の責任範囲を超えた課題が発生しているということと高齢者を取り巻く課題として、ケアマネジメントを困難にさせている問題に、例えば失業してアル中の息子や発達障害の孫といった家族を含む複数の社会福祉的問題を抱えていることであるとの話をされ、それらを解決するには、本人の責任部分と地域社会の力とそれを支えるNPO法人等の力が必要不可欠であると強調されていた。

例えば、「フレイルドミノ」と言われる社会性の弱まりがある。特に元役人、元教員、元会社員といった人が退職後の生活が一変し、地域とのつながりがなく、結果的にひき

こもりに等しい生活に陥ったり、それに伴う孤食なども高齢化社会の問題に通ずるとの指摘がされた。それには、家族との関係、地域、友人との関わりなどが重要であり、特に一人暮らしとなれば、更に地域の力が重要であるとも話された。

従って、団塊の世代の役割は、地域への参加と貢献をいかに進んでやり、そのためのそうした場を行政などがいかに地域に作っていくかということが大切であることも分かった。退職後は、時間があるので、子育てを手伝うことも楽しみの一つであり、「子ども食堂」なども良いとすすめていた。なぜなら、「地域包括ケア構築にあたって主役は市民です。広く市民を仲間に入れる方法の一つは、子育てを対象に入れることです。」との大牟田市の言葉をひき、そうすることによって、子育て支援が進み、若者世代も他市から引き込むことができるとのことだった。

市長の英断が重要であるとの話に、今、大きく舵を切る時が来ていると感じた。

パネルディスカッション 地域共生社会の実現を目指し地域づくりとは

三重県名張市 市長 亀井 利克氏

老いも若きも、男性も女性もまた障害とか難病のあるなしとかではなく、全ての市民が社会参加できる互助共生社会を作っていくための施策を進めていた。少子高齢化社会が進むと人口は江戸時代に戻ると言われ、そんな社会を目指し、自分でできることは自分で（自助）、それでできなければ近隣で（近接補完、互助）、それでもできなければ地域（共助）、その次が行政（公助）ということで、財政力も厳しいことから、これをきちんと進めることが重要とした。そのための弊害になる補助金や区長性を廃止し、もっと自由に地域に必要なことに使える制度の構築をし、市内15地区にある公民館を市民センターに変え、より自由な運営ができるようにした。そこに「まちの保健室」という相談窓口であり、行政とのつなぎ役となる機関を置いた。この取り組みの成果として、健康寿命が全国平均を大きく上回り、医療費も平均を下回っている。

そこに「名張版ネウボラ」も入れ込んで、子育て包括支援センター機能も持たせていた。これには、子育ての安心が評価され、25歳以下の転入が転出を上回った。これは、「地域福祉教育総合支援システム」を立ち上げた。これは、1つの問題に1部局で解決できることは少なく、必ず、教育と福祉の連携が必要になることから、ワンストップでエリア会議を開くことができるようにしたとのことだ。名張市は、「妊婦応援宣言都市」を宣言し、「認知症サポーター」のように、子どもの虐待やネグレクトを早期発見する「子育てサポーター」も進めていく予定と意気込みを話された。

この取り組みが大変話題となり、国のモデル事業として全国展開が決まった。ぜひ、名張市に視察をさせていただきたいと思っている。

まさに、市長の覚悟と責任による英断がいかに必要か強く感じた。

地域共生社会の必要性について、1つ目に、福祉ニーズの多様化、複雑化への対応として、家族、地域の支援力が低下しているなど世帯単位で複数の問題をかかえている状況への対応が必要。2つ目に、人口問題への対応ということで人手不足は介護のみではなく、様々な業種で人手不足に陥っている。このため、地域住民の参画と協働で誰もが支え合う共生社会の実現が必要になっている。それが、「ニッポン1億総活躍プラン」につながっている。子ども、高齢者、障がい者などすべての人が地域、暮らし、生きがいをともに作り、高め合うことができる地域共生社会の実現を政府も目指している。

「地域ケアシステム」は、地域共生社会を実現するためのシステム、地域共生社会はゴールであり、地域ケアシステムはそのためのしくみ、手段であると言われ、とても、納得できた。そのために、市町村に努力義務を課しており、その1つ目は、地域住民の地域福祉活動への参加促進のための環境整備、2つ目が、日常生活圏域での総合的な相談、連絡調整を行う体制づくり、3つ目は、市町村圏域で、複合化した地域生活課題を解決するための体制整備である。言い換えて、地域住民が我が事として参画して、人と人、人と資源が世代や分野を超えて丸ごとつながることで、住民一人ひとりの暮らしと生きがい、地域をともにつくっていく社会を作っていくことである。

それに伴い、公的支援の縦割りから丸ごとへの転換、「我が事・丸ごと」の地域づくりを育む仕組みへの転換、言わば、地域力の強化と公的支援の見直しが必要になることも分かった。共生型サービスの創設ということで、これは、障害と介護で相互に乗り入れやすい富山方式に見習うものとも紹介された。

今は、介護と保育で今は保育も足りない状況でも、いずれピークアウトするので子どもの数が減ってくるときに、介護へ移行できるようにするなどキャリアパスを複合化して考える必要も出てくると言われた。

これからは、医療、介護、保育とそこに人が出入りできる状況、環境を整備しておく必要があると改めて知った。

NPO法人「地域ケア政策ネットワーク」代表理事 山崎 史郎氏

本当に、地域に求められてくるのは、もっとサービス論、ケア論を超えたつながりの本当の人と人との場、これをどう作るか。これが江戸時代の話につながっていくということで、名張市の取り組みを評価していた。行政を頼る前に地域で自分たちでまず考え、地域には考えることがいっぱいあって、この考える場をつくって行くことが大切であり、地域内分権という地域住民が自分たちで考え解決していくという自覚を持ち、多様で柔軟な構造を持った市町村こそ、これから人口が減っても、地域として残っていくことができる。そのために準備を進めていくが非常に大事であると強調していた。

そうして作られた組織も人が高齢化し、弱くなり、劣化する時、新たに、それに代わる若い人材を地域に要請し、研修の機会を作り、次の人材を育成することが、行政の役割であるとの話をされ、行政の側面的な支援の必要性を感じた。この人選は、充て職的

な持ち回りではできるものではないとも感じていた。自分たちで自主的に動いていく人たちであることが不可欠な条件である。

介護保険の改正で、地域支援事業をつくることによって自由に地域の多様性にあったしくみと財源のしくみを今作り、10年後15年後に地域共生社会を作り出すことができることを狙って考えられたことが分かった。それをいかに本市にあったものにしていくかが重要だと感じた。

第3分科会　　これからのあるべきサービス像

埼玉県和光市 市長 松本 武洋氏

和光市では、介護保険の計画時に、日常生活圏域を中学校区に設定し、調査も戸別にしっかり対象者から回収したり、サービスは日常生活圏域で完結する形のしくみをつくるなど、介護保険制度に力を入れてきた。その結果、地域ケア会議も介護保険の分野では成果も出てきているとのことだ。

また、東京に隣接しているという立地から、埼玉都民とまで言われ、ほぼ4割は東京方面に通勤している。また、3世代の家庭はほぼいない状況で保育園の待機児童も発生している。そういう状況なので早くからネウボラも取り組んでいる。

もう1つの特徴は、教育委員会の制度改革をして、教育と福祉、いわゆる教福連携、教育とコミュニティ、教育と地域福祉の連携、地域施策と福祉の連携をトライアングルの形を教育大綱の中にしっかりと書き入れた。

コミュニティスクールも実施し、地域に関わっている人が別の肩書で教育にも関わっている形を形成し、教福の連携の一つの成果として、生活困窮者の家庭向けの無料の塾「アスナル教室」を実施できている。担当は福祉の社会援護課であるが、実際に教えるのは先生であり、ボランティアのコーディネートは教育委員会が全面的に支援する仕組みができている。これも共生社会の一つの成果である。

鳥取県南部町 前町長 坂本 昭文氏

地域包括システムの理念として、安心基盤を作ることに力を入れ、「地域振興協議会」というものを、地域のことを考えるには地域ごとのこのような安心基盤が必要ということで立ち上げ、拠点となる公民館を教育委員会から町長部局へ移し、補助金は出しても、口は出さないということで運営は、「地域振興協議会」に任せている。ある地域では、空き家を借り上げ、コミュニティホーム、デイサービスなどを実施している。

地域分権内の組織、受け皿として、「地区福祉協議会」がある。そこには、自治会、PTA、婦人会の方などに入ってもらい、整備し、地域の再構築を図っている。

愛知県高浜市 市長 吉岡 初浩氏

高浜市は5万人弱の小さな市で、財政的にもあまり豊かではないが、そのため、市の取り組みにいろいろな工夫が必要になり、地域共生社会への取り組みも進んでいったのではないかと分析していた。

高浜市は、地域のことは地域が一番よく知っているということで、小学校区に1つの「まちづくり協議会」を作り、住民による互助型の活動組織で活動を進めている。中には、NPO法人を取って活動している協議会もある。活動内容には、買い物、困りごと相談及び解決などもしている。行政はその活動を交付金を出して支援している。

また、まちの中心にある「いきいき広場」に子どもの関係はすべてここで完結できるような組織を作り進めているが、やはり、子どもの問題と言っても、子どもだけではなく高齢や障害などその家庭の複雑な問題もはらんでいることが分かり、全てに問題を「丸ごと」の形で取り組んでいる。そこで、子どもができてから、その家庭を支援していく地域の「マイ保健師」を配置し、支援の取り組みを進めている。

子ども食堂基金を作り、子ども食堂を実施し、地域の中に頼れる大人がいるということも含め、子どもたちを支援している。

また、生涯現役のまちづくり事業として、高齢者が自分で選択して、一日町に出て自分の時間を過ごしていただくという活動も進めている。

地域に合ったできることの最大化のため、関係者の知恵を絞って追及することを本市にも、もっと取り組んでいけるのではないかと感じる。

厚生労働省老健局振興課 課長 込山 愛郎氏

地域の課題を把握すること、そして、その地域の課題を見える化する。さらに、その地域にある社会資源にどういうものがあるか、また、それをきちんと見える化する。そして、そのための拠点をどうするのか。それらを統合していくために行政がきちんと関わっていく必要がある。

介護保険という枠組みで培われた財産を、今度、そのほかの世代に対してどのように応用していくかも問われていく。今年度から、要支援の方のサービスを地域支援事業に移す制度改正が行われた。それは、例えば、丸ごとの相談窓口とか、丸ごと解決機関は、すでに地域包括支援センターでそれと同じことが行われているので、今あるサービスを無くすということではなく、財政的、人的配置など現状に合わせ、制度的に進めたものと考えていくべきである。

地域支援事業の意義を改めて認識できた。地域をしっかりと見渡して本市にふさわしい事業が展開されることを期待したい。

特別講演 認知症とともに生きる 丹野 智文氏

若年性認知症を発症し、家族を始め周りの人々に理解を得ながら、力強く前向きに生きている丹野氏の講演を聞くのは2回目になる。思いがけなく発症した自分の病気を受け止め、克服するための努力をし続けている姿にとっても人としての強さを感じた。

そして、もっと大切なのは、病気だからと社会から排除するのではなく、彼の症状をそのままを受け止め、自然に周りもできることから無理なく手を差し伸べていくこと、支援を続けていくことができる思いやりや優しさであると感じた。それがあからこそ、本人も人間らしさを持ち続けて生きることができていると感じる。

まだまだ、若年性認知症についての理解は進んでいるとは言い切れないが、彼のこうした活動を含め、もっと理解者を広げていくこと、周りの人たちの対応などを周知していくことが急がれる。とても明るくて爽やかな人柄に、ご本人とともに周りにいる関係する人達へ敬意を表したい気持ちでいっぱいである。